令和３年１月２６日発行

北代縄文館ミニ企画展

長岡杉林遺跡Part2

長岡杉林遺跡の位置と概要（図1）

位置　長岡杉林遺跡は、長岡丘陵上の標高約１５～２０ｍに所在します。遺跡の北側は、北東に伸びる緩やかな傾斜の谷に面し、南側は幅約１００ｍ、高低差約５ｍの大きな谷が西に伸びます。また、長岡杉林遺跡の西方、約２００ｍには、北代遺跡が所在します。

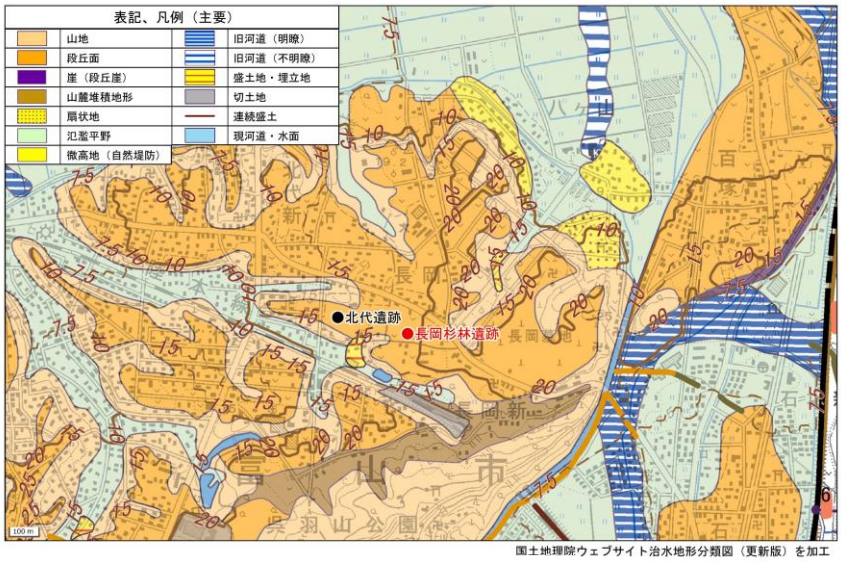

図１　地形分類図

概要　長岡杉林遺跡は、縄文（早期・中期・後期・晩期）、弥生、古墳、奈良、平安時代の長きにわたり営まれました。昭和６１（1986）年度の調査（３，２００㎡）では、縄文時代後期の竪穴住居跡１棟、奈良・平安時代では、竪穴住居跡２棟、掘立柱建物跡６棟、井戸跡１基等が出土しました。遺物は、縄文土器等のほか、奈良、平安時代の土師器（はじき）、須恵器（すえき）等が多数出土しました。遺構や遺物の出土状況から、長岡杉林遺跡は、奈良・平安時代を中心に栄えた遺跡といえます。

奈良・平安時代の長岡杉林遺跡（図２）

奈良時代　調査区の北西部を中心として、竪穴住居跡２棟、掘立柱建物跡３棟、穴９か所等が出土しており、南端及び北端の遺構を除くと、住居跡等は約７００㎡の範囲にまとまっています。

竪穴住居跡のＳＫ０７は、長辺３．５ｍ・短辺３．２ｍで、深さは５～２０ｃｍです。ＳＫ０８は長辺４．５ｍ・短辺２．９ｍで、深さは５～１５ｃｍです。２棟の住居跡にはそれぞれ、カマドが造りつけてありました。

掘立柱建物跡のＳＢ０１は、桁行６ｍ、梁間５．１ｍです。ＳＢ０２は、桁行６．１ｍ、梁間５．１ｍです。ＳＢ０４は、一辺４．８ｍの正方形です。

奈良時代の出土遺物は、須恵器（すえき）では食事用等の杯（つき）・坏蓋（つきふた）、貯蔵用等の甕（かめ）・壺（つぼ）・瓶（へい）・鉢（はち）、煮炊き用等の甕・鍋（なべ）が主に出土しています。

平安時代　９世紀後葉から１０世紀中ごろの掘立柱建物跡３棟、井戸跡１基、溝跡２条、穴１か所等が出土しています。

掘立柱建物跡のＳＢ０３は、一辺２．７ｍの正方形です。ＳＢ０５は、桁行５．４ｍ、梁間４．５ｍです。ＳＢ４０は、桁行６．６ｍ、梁間５．４ｍです。

井戸跡のＳＥ１５は径約１ｍ、深さは約４．５ｍで、発掘調査当時も井戸跡の最下部から水がしみでていました。

溝跡のＳＤ１４は東西ともに調査区外へ伸びており、幅０．６ｍ～１ｍで長さは約４３ｍ、深さは１２～３２ｃｍです。ＳＤ１６は南側が調査区外へ伸びており、幅約０．６ｍで長さは約１２ｍ、深さは約２５ｃｍです。

平安時代の出土遺物は、須恵器では食事用等の杯・坏蓋、貯蔵用等の壺・瓶、土師器は、食事用等の碗・皿、煮炊き用等の甕・鍋が主に出土しています。また、瓦塔片（木造建築の塔の形を模して作られた焼物の塔・図３）や緑釉陶器片（碗や火舎：香炉の一種・図３）など特殊な遺物も出土しています。

図３　瓦塔片（左）・緑釉陶器（中央 火舎の脚・右 碗復元）

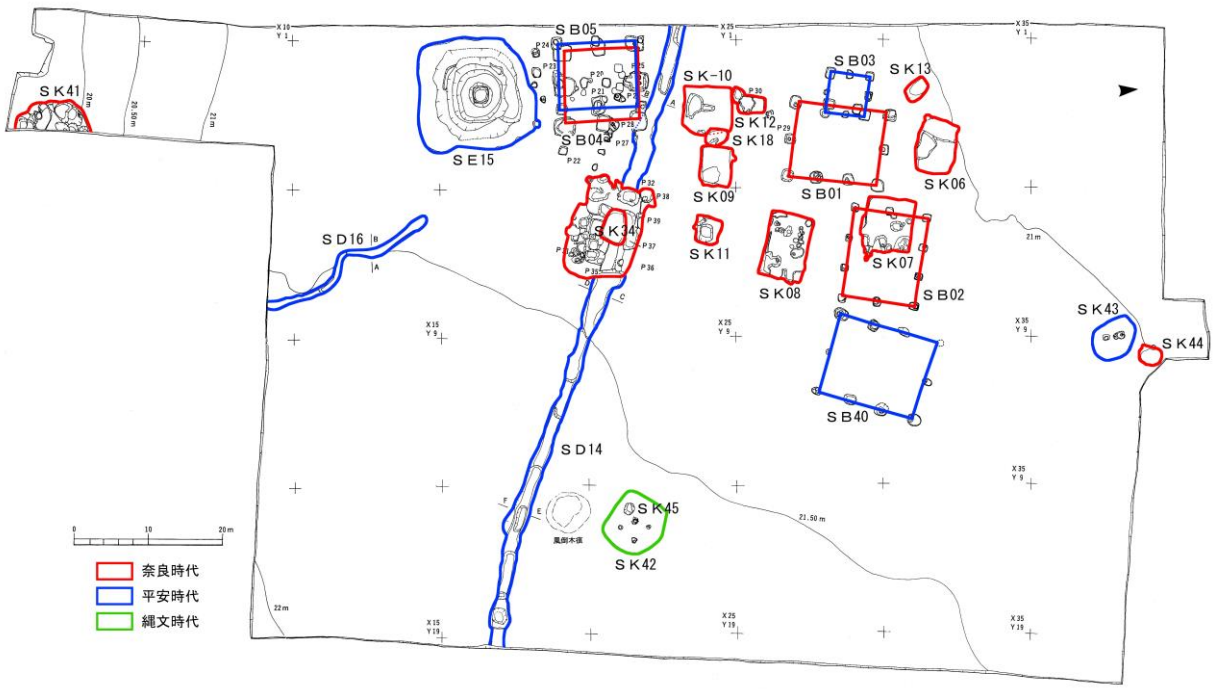

図２　遺構配置図

おわりに

奈良時代の長岡杉林遺跡は、竪穴住居や掘立柱建物等で構成された、血縁的な結びつきの強い小家族（豪族）の居住区の可能性があります。平安時代に入ると、瓦塔片、緑釉陶器の火舎等の仏教的色彩の強い遺物が出土していることから本遺跡の周辺に展開した複数の小集落を含めた、拠点的な集落であったことが推測されます。

主要引用・参考文献

富山市教育委員会　1987『長岡杉林遺跡』
富山市教育委員会　1997『史跡北代遺跡発掘調査概要』

https://www.city.toyama.toyama.jp/etc/maibun/index.htm

編集・発行　富山市教育委員会埋蔵文化財センター